上澤謙二

一、保育の一つの極端はこれ

物事には必ず極端がある。極端はたいがい二つある。一方の「極」と、他方の「極」がある。二つの極は必ず正反対である。保育の世界にもそれがある。

子どもの教育には、いろいろな種類があり、場合がある。したがって、いろいろな態度があり、方法がある。

ところで、幼児の保育とは、なんと、いそがしい、気を使う、骨が折れる仕事だろう。

園児が「おはよう」と、門をはいってきたら、途端に、保育がはじまるのである。そうして「さようなら」と、門を出るまで、絶えずつづくのである。教える時間と、休みの時間というような区切りはない。ジリジリンとベルが鳴ると、先生は職員室へ帰って、椅子へもたれて、お茶を飲むというようなことはない。

いつも、子どもといっしょにいる。それも、ただ、いるのではない。いっしょに、うたう、おどる、かける。描く画も、折る折紙も、つくる粘土細工も、一人々々、見てやる。泣く子はだまして、むずかる子はすかして、けんかはとめて、すりむいた傷の手当てもするし、おもらしの始末もしてやる。

お弁当となれば、子どもたちは、ごはんをこぼす、お茶碗をひっくりかえす、ふらふらと立ちあがる。先生は「お茶をもう一ぱい。それから、食後の果物を」などと、ゆっくりしていられない。それどころか、おちついて、たべてもいられない。

遠慮も会釈もないのが幼児である。時もかまわず、ところもかまわず、いきなり「先生」と呼びかける。右からも左からも「先生、先生」である。それも、たいした用事でもないし、えらい出来事でもない。時には、返事をすると、「ポカーン」といって、笑われたりする。けれども、一々、それに応じてやり、答えてやらねばならぬ。

保育とは、実にえらい仕事である。そのえらい仕事に興味を感じ、意味を感じ、使命をさえ感ずるとは、いよいよえらいことである。それが、保育者というものである。

二、もう一つの極端はこれ

けれども、別な方向から観れば、幼児の保育とは、なんと気安い、らくな、のんびりした仕事だろう。

はっきりした教育の時間がきまっていないから、その時の都合で、長くても短かくてもよい。「この時間には、

保育の世界の両極端

ここからここまで」というような一定の限度がないから、どんなにして、どのように与えることもできる。めいめいが描くにまかせて、折るにまかせて、先生は椅子に腰かけて、時々、窓の外を眺めていても済む。

運動場へ出たら、子どもの手をひいて、ぶらりぶらりとあるいていれば、時間がたつ。そばへ寄ってくる子どもを寄ってくるままに任せて、別に相手にならないで、園舎へ寄りかかって、日向ぼっこをしていることもできる。「先生々々」といってきても、いいかげんに「ふんふん」とへんじをしていれば、やがていってしまう。思うようにならなかったら、気に入らないことをしたら、叱ればよい。「そんなことをしてはいけません」「先生のいうことをきかない子どもは、わるい子どもです」

そうすればたいがい、その通りになる。その相手は、まだ、西も東もよくわからない幼児である。思考力、判断力の未熟な彼らに、検討や批評ははたらかない。だから、先生が何をいっても、何をしても、特に不満を感じないし、別に不平をいわない。精々「あの先生はつまらない」とか「こわい」とか、そおっというくらいである。幼稚園や保育所では、子どもたちが相談して、先生排斥をいいだしたり、ストライキもおこしたりしない。

それで、先生は、保育という仕事のおそろしいことに気がつかず、反省も、検討もせず、いい気持にさえなっているとは、いよいよおそろしいことである。それが、保育者の一面である。保育者を麻痺させるしびれ薬も、落ちこませるおとし穴も、ここにあるといえよう。

三、両極端はいっしょにある

これが、保育の両極端である。まさに、正反対の世界である。

しかも、それが、まったく同じ相手の幼児に対して、同じところの幼稚園保育所で、同じ時刻の保育の間に行なわれるのである。一方の極端も、他方の極端も、やはり、子どもとうたい、あそび、描き、つくり、いっしょにお弁当をたべる世界である。

だから、内容においては、千里もただならずちがうのであるが、あらわれる形式においては同じようで、特にちがって目立つところもないし、気づかれることもない。だから先生は、案外、平気でらくをするようになる。あるいは、うっかり、のんびりしてしまうようになる。それが、自然に、習い性となって、いつか、そういう型の保育者になってしまうのである。再びいう。保育とはえらい仕事である。保育者とはおそろしい役目である。